



## 100人のリコーダーオーケストラ！ザ・シンフォニーホールでデビュー！

「何かできんやろか？」 昨年、黒川氏からのザ・シンフォニーホールでスーパーリコーダーカルテットの公演を、「大きすぎるわ、無理や」と言う答に何度も食い下がられた。しかしこの執念の問い掛けが無かったらこの心に残るコンサートは実現しなかった。リコーダーはルネサンス、バロックはもちろんのことブリテン、ヒンデミット、林光、廣瀬量平なども作品を残し、現在もソロからリコーダーオーケストラまで驚くべき量と質の作品が「生産」されている。100人集まってやる初の試み、このオーケストラに目をつけた。100人を目標に募集したもののはじめはポツリ、ポツリ。愛好家グループを訪ねて説明をしているうちに定員を超え127人。それに鈴鹿の子供たち8人が加わって135人。演奏レベルは問わず5回の全体練習と数十回のグループ練習。大成功だった。

メンバーは、初めてオーケストラを体験したこと、素晴らしいステージで演奏できたこと、お互いの交流が出来たこと、急速に上達したこと、など枚挙にいとまがない。客席からは、小学生の見事な演奏に驚き、オーケストラに吸い込まれ、SRQ(スーパーリコーダーカルテット)の演奏を心から楽しんだ。

多くのお客様から「初めて聴く曲なのに涙が止まらなかった」と寄せられた。ロビーでのリコーダー関連業者による展示では今までに縁の薄かった人までが多く訪れた。リコーダーとその音楽に巡り会えたことを、この日のすべての人が喜び、感動したのであった。

スーパーリコーダーカルテット 北山 隆

全国初の試みという、この100人を超えるリコーダーオーケストラを大阪のザ・シンフォニーホールで実現できたことは、弊社30周年記念にふさわしい、まさに《百花繚乱》となったステージで、北山先生をはじめ、指揮の松浦先生の熱心なご指導のもと100人が一体となってスーパーサウンドをザ・シンフォニーホールで創り上げて頂いたことを心から嬉しく思っています。これを1回で終わらせたくない思いは、終了後の「来年もやるぞ！」の私の乾杯の音頭のあとの皆の歓喜が物語っています。事務局としては色々皆様にご迷惑をお掛けした部分も多々あったかと思いますが、来年は段取りもわかってきましたので、少しはスムーズにできると思います。来年は100人？127人を超えるオーケストラを目指して、皆で頑張りましょう！

制作プロデューサー 黒川浩明

ザ・シンフォニーホールで響くリコーダーの音色……。オープニングは8人のスーパーリコーダーキッズの演奏に始まり、子どもの素直で美しい独特の音に釘付け。「さあ、大人も子供に負けんように頑張っ！」と大人も邪念が入りながらもホールが包み込む音に陶醉する100人越えのサウンド……。そして、後半は4人しか舞台にいないのに、これまた美しいリコーダーのハーモニー。やっぱりこのホールでしか味わえない音色がありました。

制作マネージャー 西村典子



チェロ 河野 文昭    ピアノ 木下 千代    ピアノ 山上 明美    ヴァイオリンⅠ 金関 環    ヴァイオリンⅡ 菊本 恭子    ヴィオラ 金本 洋子    チェロ 北口 大輔    ヴァイオリン 八幡 順    ピアノ 松村 英臣    ソプラノ 岡田 晴美



ピアノ 池田 洋子    ヴァイオリン 釋 伸司    ヴィオラ 松田 美奈子    チェロ 雨田 一孝    コントラバス 関 一平    ピアノ 内田 裕子    ヴァイオリン 田野倉 雅秋    チェロ 近藤 浩志



## ザ・シンフォニーホールに響いたシベリウス歌曲と室内楽の名曲の余韻！

よくよく考えると「サマーミュージックフェスティバル大阪」を客席で聴くのは初体験だった。8月30日にザ・シンフォニーホールにて、「百花繚乱～記念イヤーを飾るステージ」と題した今年の最終公演のことである。私がこのフェスティバルの構成監修を受け持って今年で8年目となったが、これまでは私がステージマネージャーを務めるいずみホールだけの開催だった。それが今年、私の担当はいずみホールの3公演なのだが、構成監修の私の前任者である網干毅さんが企画する「夏祭なにわなくとも室内楽」も巻き込んで、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール、いずみホール、そしてこの日のザ・シンフォニーホールと、大阪を代表する3つのコンサートホールを股にかけての開催となった。制作の大阪アーティスト協会が今年設立30周年の節目の年を迎えたお祝いなのだ。

最終日のザ・シンフォニーホールは昼夜2公演。昼は北山隆さんほかのスーパーリコーダーカルテットが100人のリコーダーオーケストラと登場した。そしてこの夜の公演は、8公演にもおよんだ「サマーミュージックフェスティバル大阪2015」の総決算だった。出演したのは大阪アーティスト協会の30年の歴史に所縁の深い演奏者ばかりで、代表の黒川浩明さんの想いが詰まったステージ構成になった。

最初に登場したのが河野文昭さん(チェロ)と木下千代さん(ピアノ)。ショパンの「チェロとピアノのためのソナタ」が緻密なアンサンブルで響く。続いて、シューマンの「ピアノ五重奏曲」が山上明美(ピアノ)さんと金関環さん、菊本恭子さん(ヴァイオリン)、金本洋子さん(ヴィオラ)、北口大輔さん(チェロ)で演奏された。当初、第1ヴァイオリンには稲庭達さんが座るはずだったところ、4月に急逝。代って金関さんが

入ったアンサンブルは、丁々発止の闊達なものだ。

小休憩を挟んで登場したのは、このところ活発に演奏活動を繰り返している八幡順さん(ヴァイオリン)と松村英臣さん(ピアノ)のデュオ。モーツァルトの「ソナタK.301」とヴェニヤフスキ「スケルツォ・タランテラ」という対照的な作品が、音楽への真摯な取り組みのもと演奏された。岡田晴美さん(ソプラノ)は松村英臣さんの丁寧なサポートで、今年生誕150年を迎えたシベリウスの歌曲をドイツ語訳で。言葉を伝えるのが歌曲なのだということを、改めて思い知らさる。

休憩があって、大御所の出演が続いた。池田洋子さん(ピアノ)はシューベルトの「ピアノ五重奏曲(ます)」を、釋伸司さん(ヴァイオリン)、松田美奈子さん(ヴィオラ)、雨田一孝さん(チェロ)、関一平さん(コントラバス)と。玉が転がるように軽やかに響いたピアノの音が印象深く、慈しみ深いアンサンブルがしっかりとあらわれた。最後は内田裕子さん(ピアノ)がベートーヴェンの「ピアノ三重奏曲第7番(大公)」を弾いた。大阪フィルのコンサートマスターの田野倉雅秋さんとチェロのトップ奏者である近藤浩志さんとがっぷり四つに組んだ演奏だ。私的な思い出になるが、「内田裕子、大阪フィル、ザ・シンフォニーホール」と揃うと、31年前の夏、1984年8月24日に、この組み合わせ、この空間で、チャイコフスキーの「ピアノ協奏曲」を聴いたことを思い出す。偶然とはいえ座席もほぼ同じ場所だった。その後30年の大阪アーティスト協会が生まれ育った歩みに想いを馳せつつ、時の流れと時代の移り変わりを深く噛み締めた一夜になった。